

I. 研究の動機及び目的

大学運動部に入部する人のほとんどは高校までの自身のスポーツ経験、例えば高校まで継続した部活動であったり正課体育で経験した種目の部活動に入部する人が多いと考えられる。一方で、高校にはない部活動に入部し新しい種目に挑戦しようとする人もいる。部活動は新入部員にとっては新環境であり、その新環境への適応を図ることが多くの部員にとって最初の課題である。特に新たな種目の部活動に入部した人は、新環境に対し様々な抵抗や葛藤をしながら適応していくと考えられる。

筆者が所属していた金沢大学ヨット部の価値観や行動様式も、今までの経験してきた部活動とは異質であり、それらに適応することは容易ではなくやめたいと思うこともしばしばあった。しかし、筆者も含めヨット部を退部せずに続けていた人たちは、時が経ち様々な出来事を経験し試行錯誤を経ながら金沢大学ヨット部の文化に適応しヨット部部員らしくなったと考えられる。つまり、金沢大学ヨット部の文化を理解し、自身の価値観や行動様式を変容してヨット部の文化を受容したと考えられる。そこで、金沢大学ヨット部において、部員はどのように金沢大学ヨット部文化を理解し受容したのだろうかと思ったのが本研究の動機である。

そこで、本研究ではヨット競技未経験者である金沢大学ヨット部部員が自分の持つ行動様式や価値観と離れたヨット部文化と出会い、それらをどのように受け入れ金沢大学ヨット部部員になっていくのかという、部活文化の受容過程を明らかにすることを目的に研究を行う。

II. 研究の方法

(1) 調査方法

藤田^{1) 2)}は、定量的手法では学校運動部における文化が部員に共有されていく過程や、部員たちの営みを見過ごしてきたと述べ、参与観察やインタビューという定性的アプローチの必要性を述べている。そこで、本研究においてはインタビュー調査を採用した。分析者が対象集団の構成員であったことによる分析上の欠点を補うため、分析はインタビューによって得られた対象者の回答にのみ限定し、資料の客観的な解釈に十分配慮することにした。

(2) 対象

金沢大学ヨット部に所属していた4年生7人(男4、女3)を対象とした。

(3) 分析の視点

文化を受容するとは、集団が求める価値観と行動様式を受容することであると考えられる。価値観とは集団で行動する際の基準となる考え方であり、行動様式とは集団において求められる行動の仕方である。行動様式は価値観によって方向付けられる。価値観は観念でありその実体は捉えることができないため、行動様式の受容過程に焦点を当てる。そして、受容過程をより明確にするため、部員が入部当初抵抗や葛藤に感じていた行動様式に注目

した。抵抗や葛藤に感じていた行動様式に対し、どのような葛藤があり、どのような抵抗行動があったのか、そして、ヨット部を続けていくうちに何がきっかけで、どのような出来事を経験することで抵抗や葛藤がなくなっていくのかを明らかにする。解消時の心理的状況や行動の変化に注目し、この抵抗解消過程を分析することによって、行動様式の受容過程を明らかにする。

Ⅲ. 結果及び考察

(1) 金沢大学ヨット部文化の受容過程

本研究で取り上げた金沢大学ヨット部新入生が最も抵抗を感じる文化的特徴は、①入部当初ヨット競技への意欲がない、②休みがない、③お金がかかる、④艇庫生活の4点である。

①入部当初ヨット競技への意欲がない

入部当初ヨット競技への意欲がないのは、ヨット競技未経験であるのに入部してからしばらくは本格的にヨットに乗ることができないため、ヨット競技の楽しさや魅力を知ることができないためであった。「ヨット部として活動することが友達と遊ぶという感じだった」「ヨットに乗らんくてもいいわとか、ヨットに乗りたくないわという感じだった」「みんなが艇を作っている最中に、僕だけ物影に隠れてみつからないようにしていました」などと言うように、ヨット部に入部したにも関わらずヨット競技への意欲がなかったことがわかる。そして、ヨット競技と関わらないようにする行動をとっていた。

しかし、ヨットに本格的に乗るようになった9月合宿から、ヨット競技への意欲、態度が変わってくる。「自分が主役として乗れるようになった1年生の9月に急に変わりました、そのときは乗ることや艇を操ること自体が面白くて、それからヨット競技の魅力がわかってきたという感じです」と言うように、ヨット競技未経験者であったかれらにとって、ヨット競技と出会い真剣に取り組むことではじめてヨット競技の魅力を知ることができ、ヨット競技は面白い、上手になりたい、レースで勝ちたいという気持ちになることで、ヨット競技者としての自覚が生じる。それからは、練習に取り組む態度や意識、そして陸でもヨット競技と積極的に関わるようになる。さらに、上回生になることで、金沢大学ヨット部を強くしようとする意識から、自分だけでなく下級生やチーム全体を考えた行動をとるようになる。

②休みがない

入部当初はヨット競技やヨット部の生活に抵抗があり、さらに大学生活に慣れていなかったため、土日をヨット部に費やしていることが不満、苦痛であった。ある部員は、「学校も毎日あって唯一の2日間の休日でもヨットに取られて、心と体、特に心を癒す時間がなくてすごい嫌でした」と言った。さらにこの部員は、「ヨット部へは嫌々行き、学校のほうも行かなくなりました」と答えた。部員は休みがないヨット部をやめたいと思いながらヨット部の練習に嫌々行き、なかには部活と学校を両立できずどちらにも反発する形になる人もいた。

しかし、「軽くレジャーのような気持ちで、楽しくなってきたからは休みがないという捉

え方はなくて、まあ遊びに行っている、楽しみに行っているという感じだったんでまったく休みがないというのは苦にはならなくなりました」と言うように、ヨット競技にのめりこみ土日ヨットに乗りに行くことが楽しいと思えるようになることで、休みがないことへの不満がなくなった。また、「できることは平日にやってしまう、どうしてもやりたいことはオフにやる」と言うように、大学生活に慣れることで、休みがなくても平日の空いた時間やオフの期間をうまく利用し、「休みがほしい」という自分の欲求を満たせるようになる。そして、休みがない生活のリズムが習慣化されることで、休みがないことへの不満はなくなった。

③お金がかかる

入部当初は、ヨット競技自体にお金をかける意味を見出せないことや、部費の使い道がわからなかったことで、ヨット部でかかるお金が高いと思ってしまい抵抗を感じてしまう。「部費を出さなければならない日の1週間後とかぎりぎりになるまでださなかった。やっぱすぐに払うのはしゃくだったからできるだけ出さないことで自分なりに反発していました」「自分主体でヨットに乗ってなかったときはヨットに自体にお金を使う気が一切なかった」と言うように、お金は払うが気持ちは嫌々だったことや、ヨットにかかるお金を極力少なくするなどの行動がみられた。

しかし、「ヨットはお金がかかるスポーツ」ということ、さらに、ヨット競技にお金をかける価値があるほど面白いと認識することで、自分の普段の生活を犠牲にしてもヨットにお金を費やそうという気持ちになる。「自分がやっていることだしお金がかかるのはしょうがないぐらいの感じになった」と言うように、お金がかかることを諦めに近い考えで受け入れていた。そして、オフの期間に必死にバイトしたり、普段の生活でお金をあまり使わないようにするなどの工夫をしてまでもヨットにお金をかけるようになる。

④艇庫生活

艇庫生活では、ある部員が艇庫生活を「現代生活に似つかわしくない」と言うように、人によって様々な抵抗に感じるがあった。特に、艇庫の汚い環境、艇庫での暮らし、人がたくさんいる環境、時間に束縛される生活に対しての抵抗が多くみられた。

しかし、かれらは艇庫がヨット部の生活の中心の場であると気づいたとき、つまり、自分がヨット部部員であると自覚してきたとき、艇庫を自分にとって居心地のよい場にするため、かれらは、様々な工夫、対応をして艇庫に馴染んでいく。「一人になりたいときは、一人でコンビニに行ったり艇庫をぬけてどっか一人で居られる場所をみつけた」「艇庫でより快適に過ごせるように、人と協力していろいろ改善していった」「艇庫の畳が汚いとか床が汚いとかなるべく見ないようにした」と言うように、自分なりに工夫して抵抗であったことをなくす、自分が行動し艇庫の環境や部活の制度を変えてしまう、抵抗であったことを無理に受け入れる、この3パターンによって、艇庫生活を受け入れていた。

(2) 何を獲得することで金沢大学ヨット部部員になるのか

ヨット競技未経験者であった部員は、何を獲得することで抵抗や葛藤があった行動様式

を受け入れ金沢大学ヨット部部員になるのかを本研究で提示した金沢大学ヨット部文化の受容過程と筆者の金沢大学ヨット部員だったことの見解から考察した。

まず、ヨット競技の楽しさや魅力を知ることが金沢大学ヨット部部員になっていく一番の要素だと考えられる。ヨット競技未経験者であった部員にとって、ヨット競技は未知なる世界であり、新たなことへの挑戦でもあるため、とても新鮮な気持ちで取り組むことができる。ヨット競技にのめりこみ、ヨット競技者らしくなることでヨット部の存在が自分の中で日増しに大きくなる。そして、「ヨットができるなら多少の我慢はしよう」という気持ちになることで、抵抗や葛藤があった行動様式を受け入れていくようになると考えられる。

また、共に楽しさや苦勞をわかちあえる仲間の存在や、金沢大学ヨット部のよさを強く感じる家族的な雰囲気を支えられることで金沢大学ヨット部を続けることができ、仲間と共に成長し切磋琢磨していくことで金沢大学ヨット部部員になっていくと考えられる。

IV. 総括

金沢大学ヨット部の文化の受容過程を明らかにすることが本研究の目的であった。この目的を明らかにするため、金沢大学ヨット部の入部当初抵抗や葛藤に感じる特徴的文化に対し、どのように抵抗や葛藤をなくし、金沢大学ヨット部が求める行動様式を身につけていくのかに焦点を当てて分析した。その結果、ヨット競技の楽しさや魅力を知りヨット競技者になることで、抵抗や葛藤に感じる行動様式を受け入れ金沢大学ヨット部部員になっていくことがわかった。これは、金沢大学ヨット部に入部する人のほとんどがヨット競技未経験者であるためであると考えられる。

本研究では、金沢大学ヨット部の入部当初抵抗や葛藤に感じる文化的特徴に焦点を当て、ヨット競技未経験者であった部員がヨット競技の楽しさや魅力を知りヨット競技者らしくなり、それまで抵抗や葛藤であった行動様式を受け入れていく過程の心理的状況や行動の変化に注目することで、本研究の目的である金沢大学ヨット部文化の受容過程を提示できたと考えられる。

<参考文献>

- 1) 藤田 紀昭 (1995) 「スポーツ集団の運営形態に関する研究—特に子どもスポーツチームに関して—」 スポーツ社会学研究 3 p49~59
- 2) 藤田 紀昭 (1995) 「スポーツ集団研究の成果、課題および視点」 日本福祉大学研究紀要 92 p228~238
- 3) 野尻 康行 (2001) 「野球部員としての行動様式をめぐる顧問と部員の相互作用—S 中野球部のフィールドワークから—」 金沢大学院教育学研究科修士論文
- 4) 岡崎 剛平 (2002) 「自主的な活動を営む中学校運動部における部活動文化に関する事例的研究—K 中サッカー部のフィールドワークから—」 金沢大学院教育学研究科修士論文
- 5) 黄 順姫 (1998) 「日本のエリート高校—学校文化と同窓会の社会史—」 世界思想社
- 6) 甲斐 健人 (1998) 『高校部活の文化社会学的研究—「身体資本と社会移動」研究序説—』 南窓社